

『義孝集』における父と子

—— 卷末増補部分に着目して ——

吉田尚平

一 はじめに

百人一首「君がためをしからざりしいのちさへながくもがなとおもひけるかな」の和歌で知られる藤原義孝は、平安時代の歌人である。一条摂政と呼ばれた藤原伊尹と代明親王の娘である恵子女王の間に生まれ、将来を嘱望されていた。しかし、義孝は疱瘡のために二十一歳という若さで亡くなってしまう。早世した義孝であるが、『拾遺和歌集』以下の勅撰和歌集に二十首入集し、その短い生涯に対し、歌才は評価が高い。中古三十六歌仙の一人であり、また、鎌倉時代の説話集である『撰集抄』では、「人丸赤人か、昔のめでたかりし人々の再生たるかなん」と評されるなど、すぐれた歌人として捉えられていたことがわかる。

そうした義孝の詠歌をもとに編まれた『義孝集』という家集がある。この『義孝集』の卷末七七―八二番歌は、七七番歌詞書に

「これは、のちにかきそへたまへるとぞ」とあることから、後に増補されたものとして捉えられている。この卷末の増補部分に関して、例えば、呉羽長氏¹⁾は、義孝の詠歌態度を検討した論の中で、

細川文庫本の第75番歌以降の歌五首、及び漢詩二句一連については、そのうち75↘78番歌（右漢詩二句一連を含む、新編国歌大観では77↘80番歌にあたる）が義孝死後の詠として伝わったものであり、79↘80番歌（新編国歌大観で81↘82番歌）は、「敦忠集」に本来あったもので、第75↘78番歌による和歌説話の内容から義孝歌と類推され付加されたと認められることから、考察対象から除く。

と述べられ、「義孝死後の詠として伝わった」ものであることや和歌説話の内容から「付加された」ものであることから、考察対象から除かれている。義孝の詠歌態度や歌風を考える場合などには、

当人が実際に詠んだものでないと考えられることから、巻末の増補部分は軽んじられてしまうようである。

そのように、『義孝集』については、巻末の増補部分を除いた形で研究が行われるのがしばしばで、増補とそれ以前の部分を合わせて論じたものは多くはない²²。しかし、こうした義孝死後の伝承に基づくと思しき増補は、収める範囲に違いはあるが伝本全てに見えるものであり、『義孝集』はこうした増補を含んだ形で享受されてきたものである。その点を考えると、この巻末増補部分を含めた形で『義孝集』を捉えてみることも必要なのではないだろうか。

本稿では、ひとまず、すべての伝本に見える七七―七九番歌（以降、便宜的に「巻末増補部分」とする）を対象とし、増補以前の部分（以降、便宜的に「原型部分」とする）と合わせて捉えることで、巻末増補部分を含んだ形での『義孝集』の解釈の可能性を考察していきたい。

二 「ちちのおとど」伊尹との関係

本稿で扱う『義孝集』巻末増補部分は次のものである。

これは、のちにかきそへたまへるとぞ、もがさやみたまひて、しぬべき心ちのするかな、しぬるか、さなりとも

しばしはとくくなせそ、誦経してんのはべりと、女御のおまへにきこへたまひけるを、わすれ給ひて、とくをさめたてまつりたまひてければ、ははうへの御ゆめにしかばかりちぎりしものをわたりがはかへるほどにはわするべしやは

またのとしの秋、六君の御ゆめに、このきみの御ふみありけるに
きてなれしころものそでもかわかぬにわかれしあきになりにけるかな

うせ給ひての十月ばかりに、せいえむそうづのゆめに、ちちのおとどのおはする所に、ものをへだててあにぎみとおはするに、あにの少将はものおもはしげにて、しやうのふえをふき給ふをみれば、ただ御くちのなるなりけり、などははうへのあにぎみよりもこひきこえ給ふを、御心ちよげにてはおはする、ときこゆれば、いとあはずおぼしたるけしきにて、たつそでをひきとどめて、かくの給ふ

しぐれとはちくさのはなぞちりまがふなにふるさとのそでぬらすらん

（『義孝集』七七・七八・七九）

これらは、いずれも「ゆめ」とあるように、亡くなった義孝が母や僧都などの生者の夢に現れ、歌を残すというものである。この

ような義孝死後の伝承は、他に『今昔物語集』や『大鏡』などの文献に見え、『義孝集』を含む十五の文献³に確認できる。

この義孝死後の伝承に関して、田坂憲二氏⁴は、『義孝集』に見られるものが、『後拾遺和歌集』、『大鏡』の本文と近似していることを、七九番歌を例にあげつつ指摘している。当該本文を以下に掲げる。

しぐれとはちくさの花ぞちりまがふなにふるさとの袖ぬらすらん

この歌、義孝かくれ侍りてのち、十月ばかりに賀縁法師の夢に心地よげにて笙をふくと見るほどに、口をただならすになん侍りける、母のかくばかりこふるを、心地よげにてはいかにといひ侍りければ、立つをひきとどめてかくよめるとなんいひつたへたる

（『後拾遺和歌集』巻十 哀傷 五九九）

さて後、ほど経て、賀縁阿闍梨と申す僧の夢に、この君達二人おはしけるが、兄前少将、いたうもの思へるさまにて、この後少将は、いと心地よげなるさまにておはしければ、阿闍梨、「君はなど心地よげにておはする。母上は、君をこそ、兄君よりはいみじう恋ひ聞こえたまふめれ」と聞こえければ、いとあたはぬさまの気色にて、

しぐれとは蓮の花ぞ散りまがふなにふるさとに袖濡らす

らむ

など、うちよみたまひける。

（『大鏡』第三卷 太政大臣伊尹⁵）

夢を見た人物の名称が『義孝集』とは異なっているが、夢に現れた義孝に対して僧が「母が恋しく思っているのに、なぜ「心ちよげ」にしているのですか」と尋ね、それに対する形で歌を詠むというように話の流れが共通している。田坂氏が述べるように、『後拾遺和歌集』、『大鏡』の本文と『義孝集』が近いことが確認できるが、その中で興味深い点が、『義孝集』に見える「ちちのおとどのおはする所に」という文言がどちらにも見えないことである。

七九番歌の他出として、他に『今昔物語集』、『袋草紙』、『古来風躰抄』、『江談抄』、『宝物集』があり、いずれも同様に夢の中のこととされる⁶が、『義孝集』に見える「ちちのおとどのおはする所に」に類する表現を見ることはできない。『義孝集』のみがこうした父に関する表現を有しているのである。

また、『義孝集』の伝本は、現在十六本⁷確認されるが、「ちちのおとどのおはする所に」といった表現はそのすべてに見えるものである⁸。

こうした「ちちのおとどのおはする所に」といった表現を『義孝集』のみが持つのはなぜだろうか。「ちちのおとど」とは、義孝の父藤原伊尹を指すものであることはあきらかであろう。『義孝集』には、これより前に伊尹に関連する歌や詞書が確認できる。以下、

それらについて確認していきたい。

殿やみたまひしころ、いかかと人のとひたるに

ゆふぐれのこしげ庭をながめつつこのはとともにおつるな
みだか

（『義孝集』六）

この和歌は、父伊尹が病魔におかされた際に義孝が詠んだものであり、そこには、伊尹の病苦を思い、嘆く義孝の姿が感じられよう。また、そのあとには、伊尹の死後の四十九日の贈答が続く。

うせさせ給ひにし、御いみはてて、人人におはしわかる
るひ

いまはとととびわかるめるむらどりのふるすにひとりながむ
べきかな

修理のかみ返し

はねならぶとりとなりてはちぎるともきみわすれずはうれし
とぞおもふ

（『義孝集』七・八）

この修理大夫源惟正との贈答では、四十九日で人々が帰っていく様子を眺め、孤独を感じる義孝の姿が読み取れよう。他にも、伊尹薨去の翌春の歌に次のようなものがある。

また、とうせ給ひて、またのとしの春、あめのふるひ
はるさめもとにしたがふよのなかにいまはふるよとおもふ
かなしな

（『義孝集』六八）

ここでは、伊尹の死からの時間の経過を感じ、年が改まっても悲しみを感じる様が詠まれている。『義孝集』中には、他にも伊尹の死を嘆く姿や世のはかなさを感じる姿が散見され⁹⁾、父を慕っていたであろう義孝の姿を感じることができる。

『義孝集』における父伊尹という存在に関して、徳植俊之氏¹⁰⁾は詠歌年次を整理した論の中で次のように述べている。

こうして詠歌年次の推定できる作品を整理してみると、歌集中には天禄三年（義孝十九歳）以降の詠が圧倒的に多いことに気づかされる。このように、作品が義孝の最晩年期に集中するというのは、作歌活動の短かった義孝にあつては当然のことと言えるのかもしれないが、この現象をもう少し細かく見てみると、実は、父伊尹の没した天禄三年十一月十一日という時点が、彼の詠作活動上の重要な意義を有する年次であつたことが窺われるのである。すなわち、天禄三年十一月以前で詠歌年次をある程度しぼることのできるのは、天禄二年の延光との贈答と、天禄三年秋の父の病を嘆いた詠だけであ

るのに対し、逆に、伊尹の死後の詠と断定できる歌は十四首にもものぼるのである。このことは父伊尹の死が、義孝の作歌活動に何らかの影響を及ぼした可能性を示唆しているのではないだろうか。

前述の通り、実際、父伊尹をめぐる歌や記述は『義孝集』中には散見しており、徳植氏が述べるように、父の死は義孝に少なからぬ影響を与えたと考えられよう。『義孝集』のみに「ちちのおとどのおはする所に」という表現が見えることは、原型部分に伊尹をめぐる歌や詞書が散見していることと無関係ではあるまい。

『義孝集』にのみ見える「ちちのおとどのおはする所に」といった表現は、義孝が父と同じ所にいることを示すものである。すなわち、原型部分において亡き父を慕っていた義孝が、死後に父と再会したことがこの表現によつて示唆されるのである。その点を踏まえて、改めて七九番歌を見ていきたい。

うせ給ひての十月ばかりに、せいえむそうづのゆめに、ちちのおとどのおはする所に、ものをへだててあにぎみとおはするに、あにの少将はものおもはしげにて、しやうのふえをふき給ふをみれば、ただ御くちのなるなりけり、などははうへのあにぎみよりもこひきこえ給ふを、御心ちよげにてはおはする、ときこゆれば、いとあはずおぼしたるけしきにて、たつそでをひきとどめて、かく

の給ふ

しぐれとはちくさのはなぞちりまがふなにふるさとのそでぬらすらん

(『義孝集』七九)

義孝は、母が自身の死を悲しんでいるにも関わらず、「心ちよげ」な姿でいる。その姿を不審におもつた僧都の問いに答える形で義孝が和歌を詠んだ。和歌に見える「ふるさと」は、ここでは、亡き義孝にとつての故郷、母が残る現世を指すものである。つまり、「なにふるさとのそでぬらすらん」とは、義孝が母の悲しみを疑問に思っていることを意味する。

しかし、こうした姿はこれまでの義孝の姿と矛盾するものに見える。例えば、『義孝集』六八番歌では、生前の義孝が父の死を悲しんでいた姿が見えていた。しかし、この七九番歌においては、義孝は自身の死を悲しむ母の姿に疑問を抱いている。近しい親族の死を悲しむという残された者の嘆きを義孝自身も経験したにも関わらず、なぜそこに疑問を抱くのだろうか。

注目されるのが、上の句の「しぐれとはちくさのはなぞちりまがふ」である。先行研究において、この「しぐれとはちくさのはなぞちりまがふ」とは、仏教の散花場面を表わしたものとされている。例えば、木村由美子氏¹⁾は、『法華経』序品に「佛説此已。結跏趺坐。入於無量義處三昧。身心不動。是時天雨。曼陀羅華。魔訶曼陀羅華。曼珠沙華。魔訶曼珠沙華。而散佛上。及諸大衆。」

とあることなどから仏土の散花場面との類似を指摘し、「散花場面を抽出する方法を以て往生を告げるものとなつてゐる」として、実際に次のような和歌をあげてゐる。

序品

くさぐさにちりかふ花はいにしへの風にまかせてふるにぞ有りける

(『公任集』二八九)

時に大衆法を聞きて弥歎喜瞻仰せん、即時に自然に無数妙花散乱す

色色に空より花ぞちりまがふこれをや法の雨といふらん

(『長秋詠藻』四四七)

ここでは、七九番歌と同様に様々な花が散つてゐる様子、極楽の風景が詠まれている。このように「しぐれとはちくさのはなぞちりまがふ」とは、「極楽では様々な花が散るものである」という觀念を描いてゐることから、義孝がゐるところが極楽だとわかる。

七九番歌は、「時雨とは、(極楽では)雨のように様々な花が散り乱れることをいうのです。それなのに、なぜ現世にいる母の袖を濡らしているのでしょうか。」と極楽にゐることを示し、悲しむ必要はないと告げるのである。ここで見える自身の死を嘆く母を疑問に思う義孝の姿は、父の死を悼む義孝の姿と矛盾するかのよう

に見える。しかし、この七九番歌では極楽往生という没後の行末が記されているのである。この七九番歌は死後の安寧が記されることで、残された者の悲しみを慰めるような歌となつてゐる。

なお、先に見たとおり、七九番歌では、「ちちのおとどのおはする所に」という表現によつて、父伊尹が義孝と同所にいることが示されていた。つまり、七九番歌は義孝がゐる場所を極楽と告げること、同所にいる父伊尹も極楽にゐることが示唆され、伊尹の極楽往生をも伝えるものとして機能している。「ちちのおとどのおはする所に」によつて、伊尹の極楽往生すらも示唆されたが、父伊尹の往生を記すことは、原型部分における父の死を悼む義孝の思いに込めるもののようにも見えよう。

三 残された者の嘆き

さて、これまで『義孝集』独自の表現「ちちのおとどのおはする所に」に注目し、原型部分に見えた父との関わりの中で七九番歌を捉え、原型部分と響きあうものとして、七九番歌があることを明らかにした。では、七七・七八番歌については、どのように捉えれば良いのだろうか。七七・七八番歌がどのような内容であるかを確認したい。はじめに、七七番歌を見ていく。

これは、のちにかきそへたまへるとぞ、もがさやみたま

ひて、しめべき心ちのするかな、しぬるか、さなりとも
しばしばはとくくなせそ、誦経しはてんの心はべりと、
女御のおまへにきこへたまひけるを、わすれ給ひて、と
くをさめたてまつりたまひてければ、ははうへの御ゆめ
に
しかばかりちぎりしものをわたりがはかへるほどにはわする
べしやは

（『義孝集』七七）

七七番歌では、亡くなった義孝が約束を忘れられたことを恨んで
母の夢に現れる。七九番歌同様に、ここでも故人である義孝と残
された親族が記されるのである。この残された親族である母恵子
女王も父伊尹と同様に原型部分にその姿が確認できる。

ははうへ、東宮にさぶらひ給ひしに、いとまにてひさし
うまり侍らざりしかば、なでしこにつけてたてまつり
し、ははうへ

よそへつつみれどつゆだになぐさまずいかはすべきなでし
このはな

（『義孝集』七三）

この七三番歌は、恵子女王が東宮（後の花山天皇）のもとに伺候
していた際に、義孝が長い間参上しなかったことに対して、「なで

しこ（撫子）を義孝になぞらえて見ても少しも心が慰められない」と
逢えないことの寂しさを訴えたものである。このように、恵子
女王は義孝を愛しく思う人物であった。こうした母恵子女王は、
義孝の死に際してどのような思いを抱いたのであろうか。恵子女
王が義孝の死後に詠んだ歌として、『拾遺和歌集』に次のような歌
が見える。

謙徳公の北の方ふたりこどもなくなりてのち

あまといへどいかなるあまの身なればか世ににぬしほをたれ
わたるらん

（『拾遺和歌集』巻二十 哀傷 一二九八）

義孝と兄挙賢が亡くなった後、世の中で似るものもないような涙
を流していると、子を失った悲しみを詠んでいる。勅撰和歌集に
記されていることから考えると、このように我が子を愛しく思う
恵子女王の姿は広く知られていただろう。七七番歌で夢を見た母
恵子女王というのは、このように義孝の死に深い悲しみを抱いて
いることが知られる人物であった。

ちなみに、七七番歌で義孝との約束を忘れたことについて、同
伝承を持つ『大鏡』では、「母北の方忘れたまふべきにはあらねど
も、ものも覚えておはしければ」とあり、忘れたわけではないが、
悲しみ故に何もわからなくなっていたとしている。一方、『義孝集』
では、「女御のおまへにきこへたまひけるを、わすれ給ひて」とあ

り、約束を忘れた人物が「女御」ともとれるような書き方になっているが、呉羽氏¹²が「彼の死で平常心をうしなつた姉女御によつて死後の処置がなされてしまい蘇生することができなかった」と指摘するように、義孝の死により平常心を失つた人物が描かれている点は共通しているだろう。七七番歌では、義孝の死を嘆いた人物が登場するのである。

次に七八番歌について確認したい。

またのとしの秋、六君の御ゆめに、このきみの御ふみありけるに

きてなれしころものそでもかわかぬにわかれしあきになりになるかな

（『義孝集』七八）

この歌は、「またのとしの秋」とあり、義孝の死の翌年の秋のものだとわかる。夢を見た人物「六君」は、他出での状況などから義孝の妹と解されている¹³。七八番歌では、妹の夢の中にあつた文に書かれていたとされ、「着慣れた衣服の袖も涙で乾いていないのに、別れた秋になってしまったことです」と死別からの時間の経過を感じて悲しみを抱えている様子が詠まれている。同様に過ぎた時を思うものとして、『古今和歌集』や『栄花物語』に次のような和歌が見える。

藤原たかつねの朝臣の身まかりての又のとしの夏、ほととぎすのなきけるをききてよめる づらゆき

郭公けさなくこゑにおどろけば君を別れし時にぞありける

（『古今和歌集』巻十六 哀傷歌 八四九）

正月などもありし世ともおぼえず。月日は変りゆけど、つゆの御湯なども御覧じ入れさせたまはず、夜大殿に籠りおはしまして、埋れ過ぎさせたまふ。月ごとに丈六の仏を造らせたまひ、御堂を造らせたまふ。世の常ならず弔い申させたまふ。前の世の御契り推しはからる。世の人もしみじうあはれがり申しけり。

およびなく影も見ざりし月なれど雲隠るるは悲しかりける

またの年の九月、女房のもとに、右大弁通俊、

しぐれつつ朽ちにし袖はいかがするあはれうかりし秋は来にけり

かくてはいかでか長らへさせたまふべきと見たてまつれど、かぎりあることにや。

（『栄花物語』巻第四十¹⁴）

七八番歌に見える「わかれしあきになりけるかな」と同じような別れた時が訪れるという表現が傍線部のように確認できる。これらは、どちらも死の翌年、喪があける一周忌の際に詠まれたも

のであり、残された人物により過ぎた時を思つて詠まれた哀傷歌である。

また、七八番歌に見える「きてなれしころも」について、呉羽氏¹⁵は六君の喪服のことを指すと指摘している。そう解した場合、「きてなれしころも」の袖が乾かないというのは、残された者である六君の悲しみが表現されていることになる。義孝の文にあつたことから考えると、七八番歌は義孝が自身の思いを詠んだもののように見えるが、服喪が終わるにも関わらず癒えない六君の悲しみを義孝が詠んだものとして捉えられる。七七番歌で義孝の死を嘆く親族の姿が読み取れたが、ここでもそうした親族の嘆きが記されているのである。

このように、七七・七八番歌ではともに故人を悼む親族の姿が描かれる。これまで七七・七八番歌を確認してきたが、先に見た七九番歌においても、「ははうへのあにぎみよりもこひきこえ給ふ」と僧都の口から嘆き悲しむ母の姿が語られている。義孝の死を嘆いた人物として広く知られた人物である母の姿がここでも記されるのである。このように巻末増補部分では、一貫して故人を悼む残された者の姿が感じられる。

原型部分において、父伊尹をめぐる和歌が散見され、伊尹の死を嘆き悲しむ義孝の姿が感じられることを述べたが、巻末増補部分に見えるこうした義孝の死を嘆く親族の姿はそれらと通ずるものとして捉えられよう。

そのことをおさえた上で、改めて七九番歌の表現に注目してみ

たい。先に見たように七九番歌では「しぐれとはちくさのはなぞちりまがふ」というように、「しぐれ」という語が用いられていた。実は、「しぐれ」を詠み込んだ歌は、原型部分にも父伊尹の一周忌の際の法華八講で交わされた贈答として見える。

殿うせ給ひて、八講したまひしついでに

きみだにもおなじぬれとてのりのあめのふるころをもたづねつるかな

されば返し

のりのあめもなみだにわかず神なづきはてやしぐれやいとどなからん

（『義孝集』六二・六三）

この「のりのあめ」の歌について、従来、次の歌との類似が指摘されている。

謙徳公のかくれてのまたのとし、かのために法華講行ひはべりけるひ、しぐれのし侍りければよみ侍りける

みあれの宣旨

のりのあめなみだもかなし神無月ふればしぐれやひまなかるらん

（『秋風和歌集』釈教歌・五八五）

傍線部のように、同一の箇所にも同一の文言が配されていることが確認できる。さらに、異本である【承空本】の文言では、みあれの宣旨の和歌との一層の類似が確認できる。

【承空本】

殿ウセタマヒテノチハカウシタマヒシニ

ナミタニソオナシミノリノ雨フレハコ、ロヲモタツネツルカ
ナ

ミヤノ御カヘシ

ノリノ雨モナミタモワカス神無月ハテテシクレヤヒマナカル
ラン

片桐洋一氏¹⁶は、こうした【承空本】が記す六三番歌との類似から「みあれの宣旨がこの場において、悲しみの余り返事のできない恵子女王に代わって詠んだか。それが後々、整えられて『義孝集』に定着したのではないかとも考えられるのである」と、みあれの宣旨の歌が六三番歌の元であった可能性を述べている。

「みあれの宣旨」という人物は、源相職女であり、修理大夫源惟正を兄に持つ。源惟正は、七・八番歌のように『義孝集』中に義孝との贈答が複数存在し、一条摂政家と親しくしていた人物として見える¹⁷。また、みあれの宣旨は、花山天皇（伊尹女である懷子の子）が幼い時の東宮宣旨であった。みあれの宣旨も兄同様一条摂政家との関わりが深かったことは間違いないだろう。

片桐氏が述べるように、みあれの宣旨の歌が先にあつたものとして考え、より『秋風和歌集』の和歌に近い、【承空本】の文言によるならば、「法の雨も涙も区別できないように流れている。神無月も末日になり、喪が明けようとしているのに、なぜ、時雨（悲しみの涙）は止むことなく降るのでしょう」と、喪が明けても消えそうにない母恵子女王の伊尹の死の嘆きを詠んだものとして、この和歌を解せよう。ここでは、「しぐれ」が残された者の悲しみを示す「なみだ」を意味するものとなっている。

一方、七九番歌の「しぐれ」は六三番歌のように残された者の嘆きを意味しながらも、極楽では様々な花が散り乱れるという極楽の風景を表すものとなっている。七九番歌では、「しぐれ」が残された者の嘆きを表すということを前提としながらも、意味の転換が行われているのである。こうした七九番歌は、喪が明けても自身の悲しみが癒えない理由を尋ねるような六三番歌と並べて考えると、まるで六三番歌に応えるような趣をもっているように感じられる。

なお、六三番歌との関連として、詠まれた時期についても指摘できようか。七九番歌は、「うせ給ひての十月ばかりに」とあるように義孝死後翌月の十月ごろに詠まれている。どちらも共に十月に詠まれているというように、六三番歌と共通する要素をさらに確認できるのである。

卷末増補部分を確認すると、義孝の死を嘆き悲しむ残された親族の姿が感じられること、さらに、その残された者の悲しむ様も

「しぐれ」と原型部分に見える表現を用いて記されていることが確認できた。このように、巻末増補部分は、故人と残された者との関係においても、原型部分との照応が感じられるものである。

四 巻末増補部分の構成意識―父子の往生譚―

巻末増補部分について、それぞれの内容を確認し、いずれも残された近しい親族の嘆きが感じられること、さらに、それが原型部分に見える伊尹の死をめぐる歌とも通ずるものであることを指摘し、原型部分との関わりが読み取れることを述べた。それを踏まえて、巻末増補部分の配列について解していきたい。

これまで見てきたように、『義孝集』は、「しかばかり」（七七番歌）、「きてなれし」（七八番歌）、「しぐれとは」（七九番歌）の順に歌が配列されている。実は、この配列は、他の文献の配列とは異なるものである。

七七―七九番歌を有するものとして、『義孝集』以外に、『後拾遺和歌集』、『今昔物語集』、『袋草紙』が確認できる。それらの配列であるが、例えば、『後拾遺和歌集』は次のような順序で歌を記す。

しかばかりちぎりしものをわたりがはかへるほどにはわする
べしやは

このうた義孝少将わづらひ侍けるに、なくなりたりとも
しばしまて経よみはてむ、といもうとの女御にいひはべ
りてほどもなくみまかりてのち、わすれてとかくしてけ
ればそのよははのゆめにみえはべりける歌なり

しぐれとはちくさの花ぞちりまがふなにふるさとのそでぬら
すらん

このうた義孝かくれ侍てのち十月ばかりに賀縁法師のゆ
めに心地よげにて笙をふくとみるほどにくちをただなら
すになんはべりける、ははのかくばかりこふるをここち
よげにてはいかにといひはべりければ、たつをひきとど
めてかくよめるとなんいひつたへたる

きてなれしころものそでもかわかぬにわかれし秋になりにつ
るかな

このうたみまかりてのちあくるとしのあきいもうとのゆ
めに少将義孝歌とてみえ侍ける

（『後拾遺和歌集』巻第十 哀傷 五九八・五九九・六〇〇）

『後拾遺和歌集』では、「みまかりてのち」↓「十月許」↓「あくる年の秋」と言うように、義孝の死後まもなくから、一か月後、一年後というように時間に沿って和歌が配列されている。詞書の文言は異なるが、『袋草紙』も同様の配列である。

また、『今昔物語集』は義孝死後の伝承を次のように記している。

卷第二十四 藤原義孝朝臣死後読和歌語第三十九

今昔、右近少将藤原義孝ト云人有ケリ。此レハ一条ノ摂政殿ノ御子也。形チ有様ヨリ始テ、心バへ、身ノ才、皆人二勝レテナム有ケル。亦道心ナム深カリケルニ、糸若クシテ失ニケレバ、親キ人々嘆キ悲ケレドモ、甲斐無クテ止ニケリ。

而ルニ、失テ後、十月許ヲ経テ、賀縁ト云僧ノ夢ニ、少将極ク心地吉氣ニテ、笛ヲ吹ト見ル程ニ、只口ノ鳴スナム有ケル。賀縁此レヲ見テ云ク、「母ノ此許リ恋給フヲ、何ニ此ク心地吉氣ニテハ御座スルゾ」ト云ケレバ、少将答フル事ハ無クシテ、此ナム読ケル、

シグレニハチグサノ花ゾチリマガフナニフルサトノ袖ヌラスラム

ト、賀縁覺驚テ後チ泣ケル。

亦、明ル年ノ秋、少将ノ御妹ノ夢ニ、少将妹会テ、此ナム読ケル、

キテナレシコロモノソデモカハカヌニワカレシアキナリニケルカナ

ト、妹覺驚テ後ナム、極ク泣給ヒケル。

亦、少将未ダ煩ケル時、妹ノ女御、少将未ダ失タリトモ不知デ、「経説畢ム」ト云ケル程ニ、程無ク失ニケレバ、其後忘レテ、其身ヲ葬テケレバ、其ノ夜母ノ御夢ニ此ナム、シカバカリチギリシモノヲワタリ川カヘルホドニハワスルベシヤハ

ト、母驚キ覺テ後、泣キ迷ヒ給ヒケリ。

『今昔物語集』卷二四 第三九⁽¹⁸⁾

『今昔物語集』では、「シグレニハ」↓「キテナレシ」↓「シカバカリ」と、『義孝集』とは逆の順に和歌が配列されている。いずれの文献での配列も『義孝集』とは異なるものである。

この三首の和歌の配列に関して、上岡勇司氏⁽¹⁹⁾は、

『後拾遺』では歌が「みまかりてのち」↓「十月許」↓「あくる年の秋」と言うように時間に沿って掲出されている。『義孝集』では時間的経過は不統一であるが、人物が「ははうへ」↓「六君」(妹)↓「せいえむそうづ」と言うように肉親から他人へと移っていく。『今昔』も時間的に揃わないが人物の配列に特徴が見える。『義孝集』と歌の配列がまったく反対であるように、人物も「賀縁」↓「妹」↓「母」と他人から肉親へと進む。しかも感情表現が「泣ケル」↓「極ク泣給ヒケル」↓「泣キ迷ヒ給ヒケリ」と高まって行くのである。『今昔』が最も劇的に構成されていると見てよからう。

と、『後拾遺和歌集』の並びが時間的経過に沿ったものであること、『今昔物語集』の構成が劇的に構成されたものであることを指摘するが、『義孝集』の配列は、「肉親から他人へと移っていく」と説明されるのみである。しかし、時間的経過に沿わない『義孝集』

の配列は、果たしてそのような解釈だけで十分としてよいのであろうか。『義孝集』の配列の意図を探りたい。そのため、それぞれが詠まれた場面について押さえていく。まず、巻末増補部分のはじまりである七七番歌がどのような場面で詠まれたものかを確認する。

これは、のちにかきそへたまへるとぞ、もがさやみたまひて、しぬべき心ちのするかな、しぬるか、さなりともしばしばはとかくなせそ、誦経しはてんの心はべりと、女御のおまへにきこへたまひけるを、わすれ給ひて、とくをさめたてまつりたまひてければ、ははうへの御ゆめに

しかばかりちぎりしものをわたりがはかへるほどにはわするべしやは

（『義孝集』七七）

詞書によると、義孝が疱瘡にかかり、「しぬべき心ちのするかな」と死を間近に感じている。そうした状況の中で、「さなりともしばしばはとかくなせそ」とあるように弔いの処置が行われないことを望んだ義孝であるが、その理由を「誦経しはてんの心はべりと」と、経を誦誦し終えたいという願いによるものであると述べている。なぜ蘇生してまで「誦経しはてん」とするのか。蘇生して法華経を誦誦する話として、『今昔物語集』に次のようなものがある。

今昔、源尊ト云フ僧有ケリ。幼ノ時ヨリ父母ノ手ヲ離レテ、法花経ヲ受ケ習テ昼夜ニ誦誦ス。而ルニ、「暗ニ思エム」ト思フニ、未ダ思ユル事無シ。若ク盛リニシテ、身ニ重キ病ヲ受テ、日頃ヲ経テ失ヌ。

而ル間、一日一夜ヲ経テ活テ、語リテ云ク、（中略）観音ノ形ニ在ス。即チ、源尊ニ教ヘテ宣ハク、『汝ヂ本国ニ返テ、吉ク此ノ経ヲ可誦誦シ。我レ力ヲ加ヘテ、暗ニ令思ムル事ヲ令得ム』ト宣フ、ト思モフ程ニ、活ヘル也」ト。

（『今昔物語集』卷第十三 第三十五）

この話は、源尊という僧が、幼少の頃より法華経を誦誦し、暗唱したいという思いを持つが、その前に亡くなつてしまい、亡くなつた後、蘇つて死後の世界の様子を語るといふものである。この話では、死後の世界に居た僧（観音）が、源尊の信心の深さを認め、蘇生させる。ここで僧は、源尊に対して、「汝ヂ本国ニ返テ、吉ク此ノ経ヲ可誦誦シ。」と戻つた後は、法華経を誦誦するように話している。源尊の最期は、次のようなものである。

法花経ヲ誦シテ失ニケリ。法華経ノ力ニ依テ、冥途ニ観音ノ加護ヲ蒙ル。定メテ悪趣ヲ離レテ善所ニ生レケムトゾ人貴ビケルトナム語リ伝ヘタルトヤ。

（『今昔物語集』卷第十三 第三十五²⁰）

このように、法華經を誦して亡くなり、法華經の力で善所（浄土）に生まれただろうとされている。このような例は複数存在し、信心の深さを観音や閻魔王などに認められたことで蘇生し、その後、さらに仏教に専心する姿が描かれ、最後に往生が記される。法華經を読むことは往生への道のひとつであったとされていた。義孝のこうした願いは、往生にかける思いを強く感じさせるものである。『義孝集』の死後伝承は、このように往生を祈願する義孝の姿からはじまっていく。

先に確認した通り、七八番歌は義孝の一周忌の際に六の君の嘆きを表わした和歌であり、七九番歌は義孝の死から一月後の十月に詠まれた義孝の往生を示す和歌であった。これらをまとめると、『義孝集』は、死を目前にして義孝の往生を強く願う姿から始まり（七七番歌）、義孝の一周忌を迎え悲しむ親族の姿が記され（七八番歌）、義孝・伊尹の往生が示される（七九番歌）といった流れとなつていく。往生祈願から始まり、往生で終わるといった往生色の強いものとして捉えることができるか。

さらに、ここで注目したい点が、没後の義孝だけでなく、七七番歌詞書で義孝の病床にある生前の姿が記されるといった点である。

これまでに原型部分における伊尹の姿と、巻末増補部分における義孝の姿が故人として悼まれる点で重なることを述べた。『義孝集』における伊尹の姿を確認すると、生前の伊尹の存在も感じら

れることに気づく。『義孝集』六番歌を再掲する。

殿やみたまひしころ、いかかと人のとひたるに
ゆふぐれのこしげき庭をながめつつこのはとともにおつるな
みだか

（『義孝集』六）

『義孝集』において伊尹は、この六番歌で初めて登場するが、ここでは「殿やみたまひしころ」というように、伊尹が病にかかったことが記される。その後、七・八番歌のように伊尹の死に関連する和歌や、六八番歌のように伊尹の死を思い起こすような和歌が詠まれる。その中には、前節で見た伊尹一周忌の際の贈答である六二・六三番歌のような和歌もある。

そして、巻末増補部分では、「ちちのおとどのおはする所に」によつて、父の往生すらも記されることとなつていた。このように、伊尹という人物に着目すると、その死の前の病を患う姿から、親族（義孝）による悲しみが語られ、さらに、死後伝承において往生が感じられるといったように、『義孝集』全体で、伊尹の死の間際から没後までにおける姿を読み取れよう。それは、まさしく、巻末増補部分で親族に悲しみ嘆かれる義孝の姿と重なるものである。

時間的経過でもなく、残された者の嘆きの強調でもない『義孝集』独自の配列は、こうした『義孝集』における故人と残された

者の姿を踏まえ、『義孝集』全体で義孝と父伊尹の最期を語るような構成を意識しているようである。

『義孝集』全体を捉えた際には、義孝・伊尹という二人の人物の生前と死、さらに往生が語られるといった内容となっていることがわかる。『義孝集』死後伝承の配列は、伊尹の存在を浮かび上げさせるものであり、集を通して二人の人物の往生を語る流れを捉えられよう。『義孝集』の死後伝承は、原型部分において、父伊尹の死を嘆いていた義孝が、その父のいる極楽へ往生するといった、この集の閉じ目としてふさわしいものとなっているのである。

五 おわりに

『義孝集』独自の表現「ちちのおとどのおはする所に」は巻末増補部分と原型部分をつなぐものとして機能するものである。巻末増補部分は、父伊尹の存在や故人と残された者の姿から、原型部分と照応するものとして読まれうるものとなっている。そうして、原型部分と巻末増補部分を合わせて捉えることで、伊尹に対する存在としての義孝の姿が浮かびあがり、『義孝集』を義孝と伊尹の死の間隙から往生までを語る往生譚として読むことができる。

巻末増補部分は、義孝死後の伝承を含む他の文献に見えない「ちちのおとどのおはする所に」という文言が存在していたり、その配列が往生を語る流れになっていたりと義孝と伊尹の最期を示そ

うとする意識が感じられるものであった。

義孝は、当時流行していた疱瘡により、兄と同日に二十一歳という若さで突然亡くなっている。この義孝の死に関しては、

疱瘡、世界にもさかりにて、この一条の太政の大殿の少将二人ながら、その月の十六日に亡くなりぬと言ひ騒ぐ。思ひやるもいみじきことかぎりなし。これを聞くも、おこたりにたる人ぞゆゆしき。

（『蜻蛉日記』天延二年八月・九月²¹）

というように、疱瘡の恐ろしさと共に悲劇的な死として多数の文献に記されるものである。この突然の死は、父伊尹の死からわずか二年後のことであつた。父を慕う義孝を知る者にとっては、あたかも義孝がその後を追って亡くなったようにうつりえたのではないか。

『義孝集』の巻末増補部分の増補者は、こうした義孝の死の様子、また原型部分に見える義孝・伊尹の姿を踏まえた上で増補を行ったのではなからうか。極楽往生、死後の安寧を語ろうとする『義孝集』の巻末増補部分を見ると、原型部分に見えた亡くなった父を慕う義孝への同情や、義孝の死を悼む残された親族の嘆きに応じて、義孝の悲劇的な死を幸福なものへと転じさせるために増補がなされたのではないかと想像したくなるのである。

*和歌の引用は、『新編国歌大観』（角川書店）に拠る。

注

- (1) 呉羽長氏『藤原義孝集』の歌風『富山大学人文学部紀要』四八
(二〇〇八年二月)

- (2) 稲賀敬治氏（『義孝集』の編纂者、あるいは構成意図をめぐる断想
―源惟正と義孝―『王朝細流抄』一（一九九一年十月））は、
うせさせ給ひにし、御いみはてて、人々おはしわかるるひ
いまはとてとびわかるめるむらどりのふるすにひとりながむべ
きかな

修理のかみ返し

はねならぶとりとなりてはちぎるともきみわすれずはうれしと
ぞおもふ

（『義孝集』七・八）

という伊尹四十九日の際の義孝と源惟正による贈答をあげ、この
「はねならぶ」の歌を死んだ伊尹の立場に立つて惟正が詠んだも
のと解し、『義孝集』の巻末に見える義孝が死後人の夢の中に現れ
詠ずるという行為と照応するものとして捉える可能性を示された。

しかし、以降、『義孝集』の研究において、巻末の増補部分とそれ
以前の部分との照応について具体的な検討はなされていない。

- (3) 収める和歌の範囲や内容に違いはあるが、義孝の死後伝承を有す
る文献として、『義孝集』、『日本往生極楽記』、『大日本国法華経験
記』、『後拾遺和歌集』、『扶桑略記』、『江談抄』、『大鏡』、『今昔物

語集』、『袋草紙』、『宝物集』、『古来風跡抄』、『百鍊抄』、『普通唱
導集』、『元亨釈書』、『帝王編年記』がある。

- (4) 田坂憲二氏『義孝集』本文考（二）―勅撰集・私撰集所収歌を
中心に―『文芸と思想』五〇（一九八六年一月）

- (5) 橘健二氏、加藤静子氏校注・訳『大鏡』（新編日本古典文学全集
三四）（小学館、一九九六年）

- (6) 『今昔物語集』、『袋草紙』、『江談抄』、『宝物集』では、「賀縁」と
いう僧の夢のこととされ、『古来風跡抄』では、「人」の夢での
こととされている。多くが僧の夢の中でのことであるが、「せいえ
むそうづ」という名が見える文献は『義孝集』のみである。

- (7) 片桐洋一氏（『義孝集』解説三、底本と伝本）片桐洋一氏、三
木麻子氏、藤川晶子氏、岸本理恵氏『海人手子良集 本院侍従集
義孝集 新注』（新注和歌文学叢書四）（青簡舎、二〇一〇年）
が掲げる十二本に、肥前松平文庫本、水戸彰考館所蔵本、京都大
学所蔵本、群書類従本を加え、十六本とする。

- (8) 『義孝集』伝本において代表的な【冷泉家時雨亭文庫本】、【承空
本】の本文を例として次に掲げる。

【冷泉家時雨亭文庫本】

なくなり給て七月はかりせいそうつの御ゆめにち、
おとゝのおはするところにものをへたてゝ、あに君とおはす
るに

あにの少将物思へるさまにてさうのふえをそふき
給とみればたゞ御くりのなるなめりとはゝ上の

いみしうこひ給に御心ちよけなりときこゆるは
あはれいふと思してたつそてをひきとゝめてかく
しくれとはちくさの花そちりまかふ
なふるさとのそてぬらすらん

【承空本】

ナクナリタマヒテノチ七月許

ニ清円ソウツノユメニチ、オト

トノオハスルトコロニモノヲヘタ

テ、アニノ少将ハモノオモヘル

サマニテオハシコノ君ハ心地ヨ

ケニテサウノフエヲフキタマフ

トミレハタ、御クチノナルナリ

ケリナトカハ、ウヘノアニキミ

ヨリモコヒタマフニ御心地

ヨケナリトキコユルヲアハス

トオホシタル御ケシキ

ニテカクノタマフ

後

シクレトハソチクサニチリマカフナニフルサトニソテヌラスラ

ン
このように、『義孝集』では、父に関する表現が確認できる。

(9) 吳羽氏(注(1)前掲論文)は、「家集中に父の死に関わる歌、そこから発する厭世的思念の歌」として、六、七、八、九、十、

十一、四三、四四、四九、五〇、五八、六二、六三、六八の十四首をあげている。また、三木氏(注(7)前掲書)は、『承空本』『義孝集』43 A、43 B(新編国歌大観番号 三五、三六)について、父の死の影響があることを指摘している。

(10) 徳植俊之氏「藤原義孝の詠作活動―義孝集詠歌年次考―」『横浜
国大語研究』三(一九八五年三月)

(11) 木村由美子氏「藤原義孝の往生歌―後拾遺集を中心に―」『国文(お
茶の水女子大学)』六九(一九八八年七月)

(12) 吳羽長氏「藤原義孝集注釈(五)」『富山大学教育学部紀要(文科
系)』五八(二〇〇四年三月)

(13) 七八番歌は、伝本により人物の異同が見える。例えば、『承空本』
「チ、キミ」、【冷泉家時雨亭文庫本】「七の君」といったものである。
吳羽氏(注7前掲注釈)は、『尊卑分脈』には、伊尹の女子
として六名が記される。」と指摘し、伊尹女、義孝の妹として「六
君」を解す。七八番歌の他出では、『後拾遺和歌集』、『今昔物語集』、
『袋草紙』、『古来風躰抄』があげられるが、『古来風躰抄』を除き、
すべて「いもうと(妹)」とする。姉である懷子を指すと解するもの
もあるが、懷子は天延三年四月三日に亡くなっているため、翌
年の「秋」には存命していない。そのため、懷子とは考え難い。
ひとまず、こうした他出の状況や系譜から、「六君」を伊尹の六女、
義孝の妹として解する。

(14) 山中裕氏、秋山虔氏、池田尚隆氏、福長進氏 校注・訳『栄花物
語①』(新編日本古典文学全集 三二)(小学館、一九九五年)

(15) 注 (12) 前掲論文。

(16) 注 (7) 前掲書。

(17) 源惟正に関しては、『義孝集』冒頭にも贈答が見え、『義孝集』において目立った存在となっている。稲賀氏(注2前掲論文)は、「この集と惟正との特別な関係」を見出し、惟正を『義孝集』の成立にも関わる重要人物である可能性を指摘している。

(18) 注 (11) 前掲書。

(19) 上岡勇司氏「歌語りから和歌説話へ」の瀬踏み―『今昔物語集』の義孝説話を中心に」『国語国文学研究論文集』三三(一九八八年三月)

(20) 馬淵和夫氏、国東文麿氏、稲垣泰一氏校注・訳『今昔物語集①』〈新編日本古典文学全集三五〉(小学館、一九九九年)

(21) 木村正中氏、伊牟田経久氏校注・訳『土佐日記 蜻蛉日記』〈新編日本古典文学全集 十三〉(小学館、一九九五年)

(本学大学院生)